

G20諸宗教フォーラム2019開催

6月11日から12日まで、京都市でG20諸宗教フォーラム2019が開催され、内外約150名の宗教指導者、国際機関の代表、大使や専門家などが参加して、現代社会に惹起するさまざまな問題について、宗教界からの提言として6月末に大阪で開催されるG20サミットに参加する各国首脳に宛て日本政府を通じて提出した。

6月11日午前10時、G20諸宗教フォーラム2019は京都府議会旧本会議場で会長を務めた瀬川大秀真言宗御室派管長の開会挨拶で幕を開けた。西脇隆俊



京都府知事と門川大作京都市長が歓迎の挨拶を行った後、前田万葉枢機卿、サウジアラビアのF・マアマルK A I C I I D事務総長、吉村暉英融通念佛宗管長、カナダのJ・クリステイ教会協議会元会長、徳増公明日本ムスリム協会会長、豪州のB・アダムス・グリフィス大学諸宗教・文化対話センター所長、村山博雅世界仏教徒青年連盟会長らが祝辞を述べた後、組織委員長を務めた芳村正徳本会常任理事が趣旨説明を行った。

続いて、全体集會が開催され、運営委員長を務めた三宅善信本会理事長の進行で世界宗教者平和会議のW・ベンドレイ事務総長が今回のフォーラムの方向性を示す基調講演を行った。基調講演に続いて、植松誠日本聖公会首座主教、米国のG・ディオツプ国際宗教の自由協会事務総長、永尾教昭天理大学学長、スペインのA・アルバチエーテ大使らが、基調講演に対する応答を行った。この後、一行は、国宝

「三十三間堂」を視察した。

午後からは、キャンパスプラザ京都において、G20諸宗教フォーラムの「中身」に当たる八つのセッションが次々と開催された。すなわち、第1S…グローバルコンパクト、第2S…気候変動、第3S…AIの脅威と人間の責任、第4S…レジリエント社会、第5S…生命科学と宗教、第6S…抑圧された人々と共に生きる、第7S…少子高齢化問題、第8S…格差社会と貧困という、どれも今日的な課題である。

11日午後には、この内の四つのセッションが行われた。第1Sは、クリステイ博士が進行役で、スペインのL・オルテア国際信教の自由防衛連盟事務総長、清澤悟真宗大谷派願得寺住職、ディオツプ博士の3名がパネリストとして、「自国利益優先主義」に対して警鐘を鳴らした。第2Sは、篠原祥哲W C R P日本委員会総務部長が進行役で、下間健之京都市地球環境・エネルギー担当局長、イスラエル出身のH・クシエリビッチ大阪大学大学院法律政治研究科生らが熱い議論を交わした。

第3Sは、ロボット研究の才脇直樹奈良女子大学教授が進行役で、共にエンジニア出身の中



京都府議会旧本会議場に世界中から集まった宗教指導者たち

村殊萌元真言宗大覚寺派教学部長と滝澤俊文むつみ会宗務長に
加え、文理の分野を超えて造詣の深い三宅理事長が加わり、人類社会が初めて直面する課題について話し合った。このセッションの内容は、6月18日付産経新聞で特集記事として大きく取り上げられた。また、第4Sでは、本会の奥野卓司副会長が進行役で、藤田裕之京都市レジリエントシティ統括官、J・ラソングウ富山市政策参与、懸野直樹野宮神社宮司、レバノンのM・アブニメル上級顧問の4名が熱のこもった討議を行った。

12日は、朝から第5SがスウェーデンのH・ウコ元W i f P

欧州会長が進行役で、大西龍心高野山真言宗観音院住職、三宅理事長らがパネリストとなり生命科学の果たす倫理的問題について幅広い観点から討議を行った。第6Sでは、B・アダムス教授が進行役で、中国によって支配されているウイグル出身のモハメド・サウティ氏、小林秀英チベット問題を考える会会長、天江喜七郎元特命全権大使がパネリストとなつて、独裁的な政権によって抑圧されている人々の問題に光を当てた。

第7Sでは、釈徹宗相愛大学教授が進行役で、前野直樹日本ムスリム協合理事、國富敬二W C R P日本委員会事務局長、米国のH・ハインバック女史らがいかにすれば少子化に歯止めをかけることができるかという問題にユニークな解決方法を提言した。第8Sでは、稲場圭信大阪大学大学院教授が進行役で、石川えり難民支援協会会長、イスラエルのアッシャー・マオズ・ペレス法学大学院長、ボスニアのJ・ポストK A I C I I D渉外部長がパネリストを務めた。

午後の全体集會では、各セッションの討議の中身を反映した「宣言文」をウズビ・サコ京都精華大学学長のモデレートで討議して、字句や表現を一部訂正した後に採択された。この「京都宣言」は、三宅理事長とサコ学長によって、6月14日に総理官邸へ提出された。

神道国際学会 第21回セミナー 「讓位儀礼と大嘗祭」報告

椎名潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）

神道国際学会（三宅善信理事長）金光教皇尾教会総長が主催する第21回国際神道セミナー「讓位儀礼と大嘗祭」が平成31年3月5日、JR東京駅前の関西大学東京センター（東京都千代田区丸の内）で開催され、今年5月、光格天皇の文化14年（1817）以来、実に20年ぶりに生前讓位という形で皇位が継承されたことから、3名の研究者がそれぞれの研究分野から見た大嘗祭の意義について発題。休憩の後、パネルディスカッションが行われ、活発な議論が展開された。

セミナー開催の時点では、新元号が「令和」と発表されておらず、さまざまな元号候補が議論されていただけに、JR東京

駅を見下ろす会場のサピアタワー9階講義室には開場前から多くの参加者が詰めかけ、その関心の高さを示していた。

はじめに、本

会の三宅善信理

事長がセミナー

開催の意義につ

いて説明した後、

「明治以降、わ

が国は一世一元

制にあり、憲法

4条には「天皇

は国事に関する

行為のみ行う」

とあって、天皇

が御自らの意志

で讓位されるこ

とは想定してい

なかった。その

後、皇室典範特

例法が成立。天

皇陛下（現上皇

陛下）が平成28



多くの聴講者で盛り上がった会場



佐野真人 皇學館大学助教

教が、「大嘗祭における太上天

皇の役割」と題して講演した。

佐野助教は、2022年ぶりに

讓位という形で皇位継承が行わ

れ、現在の国民が初めて経験す

る「上皇」（太上天皇）という

存在は如何なるものか、大嘗祭

という視点に絞って考察し、「建

曆御記 大嘗会神饌秘記」（神

道体系「踐祚大嘗祭」という史

料を基に、次代の天皇によって

のみ、受け継がれるべき「秘儀」

の存在を明らかにした。

その「秘儀」とは、①神饌に

関すること②御親供の御所作③

御告文（おつげぶみ）の内容――

などで、それらは余人が知り

がたいものであり、儀式書の規

定や諸家（撰閑家）の記録には

見られないと指摘した。

具体例として、『建曆御記』

には建曆2年（1212）、順

徳天皇14歳の砌、その翌年に大

嘗祭を控えた時の後鳥羽太上天

皇が記録したという「神饌に供

すべき次第の教訓」、特に秘説

3カ事の記述が見られるという。

それによると、大嘗祭の行程

について、実に詳しく丁寧の説

明されており、例えば、32皿も

用意しなければならぬという

神饌の配膳方法では「二行様（二

列に並べる）」とか、御飯は米

二杯・粟二杯とか、そして本来

は秘すべき（代々此事不載諸家

記）諸家の記録にはない）はず

の御告文（天皇が奏上される祝

詞のようなもの）の内容まで明

らかにされている。

ただし、秘儀であるため、時

には失錯もあったようで、『後

伏見天皇御記』によると、神饌

の習礼の確認すべき事の中に、

「失錯等少々思出注之」とあ

り、「残った箸を小雀手（取り

皿）に立てながら御飯を撤する

事」として、「太閤（九条師教）

に確認する必要がある」と書き

記されている。

そして「大嘗祭そのものは、

朝廷の太政官や神祇官など、多

くの有職家が携わっており、準

備は円滑に行われるものと考え

られるが、大嘗祭の本義は天皇

御自ら御神饌を御親供し、御告

文を奏上することであり、天皇

御自身の御所作を正しく伝承し

ていくことこそが、祭儀斎行の

上での最重要なことである」と

した上で、「過去56代の天皇が

讓位受禪によって、皇位を継承

していることに鑑みれば、大嘗

祭の神事を滞りなく終えるため

には、讓位による皇位継承に

よって、太上天皇が存在してい

るからこそ、秘儀の詳細を『法

水写瓶』（一瓶の水を一滴もこ

ぼさずに一瓶に移し替えるこ

と）の如く受け継ぐことができ

た」とその利点を述べた。

日本文化史、なかでも中世思

想史が専門で、即位儀礼（特に

即位灌頂）に造詣が深い松本郁

代・横浜市立大学教授は、「中

世における即位儀礼と神仏」と

題して講演し、「秘説」という

形に記述された神仏の文化性・

視角性についての分析から見た

社会的意義と思想形成に迫った。

松本教授は、11世紀になると

「即位式の中で天皇が『仏』に

なる作法をはじめた」と述べ、

御三条天皇（1068年即位）

の即位式では、新天皇が「智拳

印」を結び、「明」と唱えたこ

とを紹介した。さらに13世紀に

なると、即位儀礼の中で、光の

象徴、光の尊格化としての仏

金剛界大日如来と一体化される

という「即位灌頂」が行われる

ようになったと解説した。

大日如来は天照大神と同格と

見なされ、釈迦如来から、毘盧

遮那仏、大日如来――その所変

の仏頂尊としての「二字金輪」

（如来が唱える真言を神格化し

たもの）に至る過程を紹介しな

がら、末法思想が広がるにつれ、

やがて即位儀礼にも、光を尊格

化した普遍的な天皇と同体化す

る密教手法が重く用いられたと

の見解を示した。

このような光や太陽神を尊重

する考えは、古くはエジプトや

広くアジアに存在するが、わが

国の天皇は太陽にはならず、太



松本郁代 横浜市立大学教授

陽を支える尊格として存在した
ようだ。

「即位灌頂」は、11世紀以後
三条天皇がはじめて修し、伏見
天皇（1265年即位）以降は
江戸時代末期の孝明天皇（18
68年即位）まで続いたという。
特に13世紀以降は、撰闋家（二
条家）が天皇に対して、独占的
に「即位印明」の伝授を行って
いた。

具体的には、頭頂に水を灌ぐ
儀礼で、これは古代のインド神
話に王が修したことが初見され
るといふ。やがて仏教に取り入
れられ、阿闍梨位を獲得する儀
式として行われたものである。

三条天皇が即位式で修した「即
位灌頂」では、水を灌がず、大
日如来の印と明が修された。

その背景として、松本教授は
「後三条天皇の即位あたりから、
末法の時代が到来したこと無
関係ではない」と分析。天皇は
宇宙を照らす存在であり、「光」
を起源とする尊格と天皇が同体
であることを示すことが求めら



マイケル・パイ マールブルク大学名誉教授

れたものと推量される。

また御光厳天皇勅撰の『新千
載集』神祇部には、大嘗祭を詠
んだ和歌の配列が見受けられ、
その中に天石窟戸（あまのいわ
と）神話や天地開闢神話が登場
することから、松本教授は「暗
黒から光が、そして混沌から神
が登場する場面を描くことで、
暗闇の中で行われる大嘗祭の特
異な神秘性を表現しているのだ
はないか」と指摘した。

そして「即位儀礼における神
仏こそ、この地上に光をあてる
存在であり、光の存在を与えら
れた天皇は、光の神仏を祀る司
祭者であった」と分析した。

さらに国際宗教学会会長を
務め、現在も神道や仏教につい
ての調査研究活動を続けている
マイケル・パイ会長は、「現在の
即位の礼と大嘗祭の宗教要
素」について、外国人としての
立場から論じた。

パイ会長は、個人的見解とし
ながら、「公的な即位の礼と極
めて宗教的な大嘗祭を区別すべ
きで、今回も5月に即位の礼を
行い、後に大嘗祭を催すことは
理解できる」と語り、大嘗祭に
ついて、「もはや霊性的文化の
領域であり、これを西洋の概念
ではシビルレリジョン（市民宗
教）と称している。そこにはあ
るの祈りやお守りはなく、価
値観や意識の確認である」との
見解を示した。パイ会長の考え
では、即位の礼さえも、市民宗

教の範疇に入るとも。

またパイ会長は、神社仏閣を
紹介した絵葉書や写真をふん
だんに使用しながら、天皇陛
下（現上皇陛下）の30年にわた
る思い出を語った。その一例と
して、「30年前、明治神宮の社
殿前には大嘗祭を告知する大き
な看板があった」と紹介。さら
に戦前に発行された『日本のお
祭』という本を示しながら、1
頁目に大嘗祭の時に神饌を供す
る「主其殿」「悠紀田」が登場
するが、それはあたかも「市民
宗教のジャンルで紹介されてい
る」と分析した。

さらに、現上皇陛下の大嘗祭
の際に、アドバイザーを務めた
鎌田純一・皇學館大学名誉教授
（宮内庁侍従職御用掛）と本会
元会長の藺田稔・京都大学名誉
教授（秩父神社宮司）と3名で
撮ったという記念写真を披露す
る場面も見られた。

休憩の後、岩澤知子・麗澤大
学教授をモデレーターに、芳村
正徳・神習教教主（本会常任理
事）や講演者3名を交えて、パ
ネルディスカッションが行われ
た。

はじめに、芳村教主が三種の
神器を先帝から受け継ぐ踐祚の
儀（5月1日）や皇位が継承さ
れ、皇祖である天照大神に稲（神
饌）を捧げる大嘗祭（11月14日）
について説明。

続いて、佐野助教は「大嘗祭
も時代によって変遷が見られ



活発な議論がされたパネルディスカッション

ここで、岩澤教授から「天皇
を稲作文化の象徴、日本の支配
者として意識した時、大嘗祭は
どれほど宗教的なのか」との問
いかけがあった。

これに応えて、松本教授は「戦
国時代などは戦乱や経済的な理
由もあって、大嘗祭が行われな
かった。やがて社会が安定した
江戸時代になると、再び実施さ
れていく。当時、大嘗祭をやら
ない天皇は、皇室をお守りする
役目の『藩屏』と言われたほど。
やるからには徹底的にやらなけ
れば意味がない。特に中世では、
大嘗祭が秘儀化し、撰闋家では
これらの秘儀を代々、伝え護ら
なければならぬとされてきた。
大嘗祭を通して、天皇は農耕民
族の象徴、長としての役割が普
遍化していった」と述べた。

また大嘗祭の変遷について、
佐野助教は「平安時代は粗末な
茅葺きの屋根を載せた簡素な建
物で行われていたようで、終
わったら、その日のうちに壊し
て、節会をしたという記述があ
る。それが近世になると、天皇
が地面に直接、坐すようなこと
があつてはならないと、次第に
巨大で立派な建物になっていつ
た。今回は江戸時代の時よりも
はるかに立派なものになるだろ
う」と述べた。

さらに岩澤教授が「大嘗祭と
憲法20条の政教分離」の関係に
ついて、それぞれの見解を糺す
と、英国人で自らも英国国教会

の司祭であるパイ会長は「英国
はうまく政教が融合しており、
王室行事に違和感はない。日本
で大嘗祭について騒がれること
自体が不思議で心配している。
また米国では、大統領就任式で
自分の信仰する宗派（キリスト
教）の聖書に手を置き、宣誓し
ているが、何ら問題にはならな
い」と反論した。

大嘗祭の政治性について、芳
村教主は「日本人にとつて稲と
は、天津神が私たちに与えてく
れた特別なもの。したがって、
大嘗祭は宗教的意味合いが強い
のは当たり前なこと、新天皇
のご誕生は目に見えない神々
のお力を改めて頂くことに他なら
ない。それは日本の安寧につな
がるのであり、政教の完全分離
は難しい」と断言した。

会場からは「現在の皇室典範
には即位の礼の規定があるだけ
踐祚の儀も大嘗祭も消えてい
る」との指摘も出され、議論は
大いに盛り上がった。

最後に、会場を提供してくれ
たアレキサンダー・ベネット関
西大学教授（本会理事）が閉会
の挨拶を行った。

なお、同じテーマのもと、3
月30日には東京都港区の聖アン
デレ教会で、また4月6日には
京都市上京区の日本聖公会京都
教区事務所、英語使用のセミ
ナーが行われ、外国人や留学生
など、多数が参加して盛況だっ
た。（5頁参照）

上皇の装束のごとく(後編)

井筒與兵衛(株式会社井筒代表取締役社長/風俗博物館館長)

江戸期の近衛基熙の日記「基熙公記」もしくは「応円満院閑白記」に書かれている霊元上皇の装束を紹介します。上皇は厳儀に出ることはないで東帯の調進は基本的にはなく、衣冠、直衣、御小直衣、狩衣を着用しました。特に御小直衣が多いです。

御小直衣・表・裏 薄色||薄い紫色、菊菱文、紅の打衣・菊菱文、単は黄

指貫は、鳥襷文固織下括 足首で袴の裾の紐をくくる(大口袴をはかなくなると膝下で上括する)

上皇の御小直衣は「甘御衣」と言われる。

東帯・青グリーンまたは赤の袍
文様は窠に竹桐、菊唐草、窠に八葉菊に菊唐草等 表袴は白窠叢文、裏紅

衣冠・色または浅黄(この浅黄は緑色を指すのではなく、クリーム色で薄い黄色を指しています)、菊唐草文、固地綾

指貫は、紫織物 文様は窠に八葉菊に菊唐草、雲鶴、浅黄藤丸文、白浮文立涌

直衣・冬は小葵文、裏葡萄染、夏は二藍染、布衣始(狩衣)以降、臥蝶丸の文あり

冠・立烏帽子(右眉)、風折烏帽子(右折り) 上皇以外は左眉であり、左折りですし、紙捻も雅亮装束抄に載っているように平安末には紫の組紐を使っています。蹴鞠をする人も紫の組紐が許されていたようです。

立烏帽子は右眉紫組緒 帖紙は、薄色(紫の薄色)

狩衣・讓位後、初めての儀式は布衣始めといい、仙洞御所の弘御所で行われます。

布衣始めというのは、御讓位後、上皇が初めて狩衣を着用する儀式です。実際は御小直衣を着用します。したがって布衣というのは小直衣・狩衣・布衣を含む装束をいいます。大臣は直衣、それ以下は狩衣・布衣を着ます。上皇が実際に狩衣を着ると大臣以下は布衣以下の装束着用になるのでこのようになっています。布衣を狩衣の類を指すときは(ほうい)といい、布の衣裳である布衣は(ほい)と言います。また、天皇が仙洞御所の上皇に会いに行く儀式の時には直衣を着ます。

乗り物も天皇は32人、16人で担ぐ鳳輦、葱花輦 になり、その後、狭いところに入る際には4人で持つ手輿に乗り換えます。上皇は四方輿 腰輿 坂輿という、6人で腰で担ぐ軽快なものになります。坂輿は四方輿の上部を外した輿でいわばオープントップのオープンカーのようになっています。極めて自由な雰囲気を感じられ

る上皇のスタイルの根拠は、江戸時代初めの、後水尾天皇の慶長20年に定められた「禁中並公家諸法度」において天子以下諸臣の決まりごとが書かれているのですが、治天という言い方もなくなった江戸期に、上皇についてはその記載がなく、法的拘束から解かれた自



袍の格袋 [はこえ]



- 冠直衣
- 冠
- 単
- 衲
- 袍[うえのきぬ]
[縫腋袍]
- 帖紙
- 蝙蝠[扇]
- 袍の欄
- 袍の欄の蟻先
- 衲が出衣になっている
- 指貫[奴袴]



●御小直衣



●小直衣

『AIの脅威と人間の本性』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表 三宅善信

6月末に大阪で開催されるG20サミットに先駆け、6月11日～12日、私が運営委員長を務めて京都でG20諸宗教フォーラム2019が開催され、内外から百数十名の宗教指導者、国際機関の代表、各分野の研究者らが集まって現代社会に惹起する様々な課題について熱心に討議し、自国の利益優先の首脳によるサミットに対して、人類全体の視野から見た提言を行った。

今回のG20諸宗教フォーラムでは、従来の宗教会議でテーマとなってきた「平和構築」、「人権擁護」、「環境保護」などの問題に加えて、初めて「AI(人工知能)」の問題が取り上げられた。近年、急激に発達したAIは、さまざまな電化製品への音声入力や自動運転車の普及だけでなく、国家や大企業による一元的な個人情報管理から自立型ロボット兵器の実戦配備まで現実問題となってきたが、今回のフォーラムでは、このことにどう対処するかについて話し合った。AIの脅威には2種類ある。AIを道具として用いた人間が実行する犯罪行為と、人間が制御しきれなくなったAI自身もたらす脅威である。前者の問題は、刃物や銃器が発明された時からあったのと同じ倫理や道德の問題であるが、後者の問題は、極めて宗教的に意味深い問題

である。人智を凌駕した人工知能が支配する近未来の世界を描いたSF小説や映画がこれまで数多く制作されたが、数十年後に人類の歴史を振り返った際に、2017年という年は、ついに「AIが人間を超えた」ということを自覚した「特異点」となるに違いない。何百年も長きにわたって、「天才の所業」と思われていた囲碁や将棋の名人をAIソフトが圧倒したのである。そのゲームソフトを制作した人の棋力はアマチュアレベルであるにもかかわらずである。「凡人」が開発したプログラムが「天才」を凌駕するには、発想や方法論上の「飛躍」が必要である。何故、そのようなことが可能になったのかというと、「^{ディープラーニング}深層学習」という方法が開発されたからである。従来のように、AIに対して人間がいちいち「教える」のではなく、AI自らが膨大な棋譜データにアクセスしてこれらから「学習する」だけでなく、自分と自分同士で「対戦」して新しい「棋譜」を積み重ねていくのである。AIには「肉体的な疲れ」がないので、あつという間に何千年分もの学習ができてしまうのである。

私がAIにおける「特異点」の問題を考える時いつも想起するのが、旧約聖書『創世記』第3章に

おける「知恵の樹」のエピソードである。

創造主は、アダムとイブに対して「エデンの園に生えている全ての樹の実を食べても良いが、知恵の樹の実だけは食べることを禁じ」ていた。「知恵の樹の実を食べると必ず死ぬ」と嘘までついて…。ところが実際には、アダムとイブはこの禁じられていた「知恵の樹」の実を食べたのに死ぬことはなく、創造主にバレるのを恐れて身を隠そうとしたので、永遠の糧を保証された「エデンの園」から追放された。そして、当然のことであるが、「善悪を知った」以上は、アダムとイブの子孫である人類は、自らの判断で行った行為に対して「責任」を追わなければならなくなった。

古事記においては、お産によって落命した愛しい妻イザナミを追って黄泉国へ赴いた夫イザナギは、「決して姿を見ないで欲しい」と願ったイザナミとの約束を破ってその醜い姿を見てしまったことによって、イザナミと永遠の別れを告げるようになった。

また、神武天皇の祖父ヒコホホデミも、愛妻トヨタマヒメが出産するところを「見ないで欲しい」と頼まれたのに、その鱈の本性を覗き見してしまったことによって愛妻と別れることになってしまう。古代ユダヤと古代日本の神話に共通するのは、人間というものは「〇〇してはいけない」と禁じられれば、余計にそのことをしたくなってしまうということである。AIを開発するということは、われわれが人間の本性に気づかせられるということでもある。

東京と京都で英語による『即位儀礼と大嘗祭』セミナー開催

3月5日に東京駅前のサピアタワーで開催された第21回国際神道セミナー『即位儀礼と大嘗祭』が好評で、「是非、英語でのセミナー開催を」という声にこたえて、3月30日と4月6日に東京と京都で国際セミナー『Thinking About The Japanese Enthronement Ceremonies』が相次いで開催された。

折から一カ月後に「即位後朝見の儀」が相次いで厳修され、招かれている在京の各国大使館関係者の関心も高く、聴衆の中には、大使館関係者も数名含まれていた。



京都でのセミナーは追加席が必要な盛況ぶりだった



聖アンデレ教会の十字架の下で神道的見地から議論を行った

4月6日のセミナーは、京都御所に隣接する日本聖公会京都教区事務所において開催され、約50名が聴講した。最初に、会場を提供した聖公会京都教区の高地敬主教が歓迎の挨拶をした。続いて、日文科のジョン・ブリン教授、神

道国際学会のマイケル・パイ会長、加藤大志服部天神宮権禰宜が研究発表を行った。その後、パネル討議が行われ、フロアと意見交換を行った。最後に、主催者を代表して、神道国際学会理事長を務める三宅善信師が謝辞を述べた。こちらのセミナーは、主として京都の各大学や研究機関に勤める外国人研究者や留学生で大いに賑わった。今回の英語によるセミナー開催で判明したことは、近年急激に増加した外国人観光客や定住者が求める日本文化への関心の大きさと比して、日本側の情報発信が質・量共に圧倒的に不足していることであり、この分野における神道国際学会の潜在能力の高さを発揮する機会がまだまだあるということである。



神社巡り⑬

芳村正徳
神習教教主

あ た ご じ ん じ ゃ 愛宕神社

●東京都港区愛宕1-5-3

愛宕神社は1603年（慶長8年）、江戸に幕府を設く徳川家康公の命により防火の神様として祀られ、慶長15年、庚戌本社をはじめ、末社仁王門、坂下総門、別当所等將軍家の寄進により建立された。祭礼などには下附金を賜るほど、当時の幕府の尊崇は篤いものであった。その後、江戸大火災はじめ関東大震災、帝都大空襲により社殿が焼失することがあったが、その都度、氏子中により再建され、現在に至る。

愛宕神社の利益は火に関するもの・防火・防災、印刷・コンピュータ関係、商売繁昌、恋愛・結婚・縁結び。境内には、江戸時代、曲垣平九郎が將軍徳川家光に献上したと言われる「將軍梅」や、なでると福が身につくといわれる「招き石」などがある。

また、インターネットで「東京 出世 神社」と検索すると、まず出てくるのが愛宕神社であるが、これは「出世の石段」に由来する。今から380年前（寛永11年）の春、徳川三代將軍、家光公が將軍家の菩提寺である増上寺の帰りに愛宕神社の下を通られた。満開に咲いた「源平の梅」を



大鳥居から急な石段が続く

目にした家光公は、「誰か、馬にてあの梅を取って参れ！」と命じた。しかし、この愛宕神社の石段は壁のような急勾配で、歩いて登るのも一苦勞。それを馬で取ってくるなど、とてもできそうになく、家臣たちは、みな一様に下を向いて黙っていると、家光公の機嫌はみるみるうちに悪くなり、もう少しで怒りバクハツ！というそのときに、この石段を登りはじめた者がいた。

「あの者は誰だ」

「あの者は四国丸亀藩の家臣で曲垣平九郎と申す者でございます」

「そうか。この泰平の世に馬術の稽古怠りなきこと、まことにあっぱれである」

平九郎は見事、馬にて石段をのぼり降りし、山上の梅を手折り、家光公に献上した。これにより、平九郎は家光公より「日本一の馬術の名人」と讃えられ、その名は一日にして全国にとどろいた。こんな故実が伝わっているからである。

実際に登ってみると、その石段はあまりに急で、手すりを持たずには怖くて登り降りできない。しかし、標高25.7メートル。23区内の天然の山としては一番の高さ。現在のように高層ビルが建ち並ぶ前の江戸時代には、見晴らしの名所として、見物客で賑わった。山頂から、東京湾や房総半島までを見渡すことができたとされている。

愛宕神社の代表的な祭り

・千日詣り ほおづき縁日（6月23日～24日）

この両日に社殿前にしつらえた茅の輪をくぐりお参りすれば千日分の御利益があると昔から信仰され、境内で自生していたほおづきを飲めば子供の癩・婦人病に効くと言われていた。現在はお祓い済みのほおづきを受けると、特別に社殿の中で本人もお祓いしてくれる。ほおづき市という浅草が有名だが、もともと愛宕神社から始まったもの。蛇足ながら羽子板市も当社が発祥。その賑わいは平岩弓枝著「犬張り子の謎」にも記されている。

・中祭式（6月24日 11時）

自分の厄を移した形代を神社に納め、半年間の厄を祓い清める行事。年末の大祓いに対し、夏越しの祓えという。

石段を登り切った先に社殿



・出世の石段祭（隔年9月22日～24日）

愛宕神社で一番大きなお祭り。一年の感謝を神様に捧げる。2年に1度、御神輿が出世の石段を行き来し、大変勇壮である。町内を巡行した後、提灯を付けた御神輿が急勾配の石段を登る様はダイナミックそのもので、祭りのクライマックスに相応しく興奮は一気に高まる。

・大祭式（9月24日 11時）

一年の感謝を氏子・崇敬者と共に捧げる。装束を着けた神職により厳かに執り行われる。どなたでもご参列いただける。

・お花見

これは祭礼ではないが、3月下旬から4月上旬にかけては、桜の花がとても綺麗。山全体が桜に覆われた様で、一見の価値有り。

【基本データ】

主祭神：火産靈命（ほむすびのみこと）〈火の神〉

配祀：罔象女命（みずはのめのみこと）〈水の神〉、大山祇命（おおやまつのみこと）〈山の神〉、日本武尊（やまとたけるのみこと）〈武徳の神〉、將軍地蔵尊・普賢大菩薩

境内末社：太郎坊神社、福寿稲荷神社、弁財天社、恵比寿大黒社

創建：1603年（慶長8年）

HPアドレス：<http://www.atago-jinja.com/>

秩父夜祭のルーツ 武甲山今昔

秩父今宮神社宮司・弁護士
塩谷崇之

埼玉の奥地、秩父盆地の南に高く聳える「武甲山」は、古くから「神の鎮まる山」として、地域の人々の信仰・崇敬の対象とされてきた。「秩父夜祭」のルーツもこの山への感謝の祈りにあるとされる。

しかし、人々の「心のふるさと」ともいわれてきたこの山は、セメントの原料となる石灰石で形成されていたため、貴重な鉱山資源として削られ続けてきた。我が国の近代化と高度成長の中で、かつての山頂も爆破され、現在は白い岩肌が剥き出しとなり、人工的なピラミッドのような姿を晒している。この姿に多くの人々が心を痛め、石灰石採掘の中止を求める声も高まっているが、いまなお採掘は続いている。

この山を見るたびに、幼い頃に出会った2つの文学作品を思い出す。

ひとつは、アイルランド出身のオスカー・ワイルドの『幸福な王子』という短編小説。ある町の高台に「幸福な王子」という像が立てられた。体は金箔に包まれ、目にサファイア、剣にルビーが輝き、心臓は鉛で作られた。しかし、高台からはこの町の貧しい人々の暮らしがあまりによく見え過ぎた。心を痛め



（行燈店蔵） 武甲山山頂より御花御（景百景）



かつての武甲山と、現在の武甲山

た王子は、冬に備え南国へ旅立とうとしていたツバメに頼んで、自分の宝石や金箔を貧しい人々へ分け与えてゆく。ツバメは力尽きて息絶え、王子はほろほろの姿と成り、王子の鉛の心臓は音を立て2つに割れてしまう。見窄らしい姿になった王子の像は撤去され、ツバメの死骸とともに捨てられてしまうが、王子の心臓とツバメの亡骸は天使が拾い上げて天国に連れて行ったというお話だ。

もうひとつは、米国の作家シルヴァスタインの『大きな木』という子ども向け絵本。リングゴの木と少年は友達で、互いに心を通わせていたが、少年は成長し、お金が必要となる。木は「私の実を売りたい」と言う。大人になった男が「家が欲しい」というと、今度は「私の枝で家を建てなさい」と言い、男が「遠くへ行きたい」というと「私の幹で舟を作りなさい」と、次々とその身を捧げ、ついに木は切

り株だけになってしまふ。「木は幸せだったのかな」という問いが読者に投げかけられる。時は流れ、年老いて帰ってきた男が「疲れたので休む場所がほしい」というと、木は「私の切り株に座りなさい」と言う。男は腰をかける。「木は幸せだった。」というお話だ。

いずれの作品も、原作は英語で書かれているが、世界各国の言語に翻訳され出版されているので、ぜひご一読いただきたい。我が身を削って秩父の人々の生活を助けてきた「武甲山」に神仏の姿を見て「尊い存在」と涙する人もいる。「いや、あれは人間の強欲の為せる業。許されないことだ。」と怒りを露わにする人もいる。あんなものはただの「資源」だから利用して何が悪いんだと開き直る人もいる。そんな下界の人々を天空から見守りながら、果たして「武甲山」は「幸せ」なのか？ いちど山の本音を聞いてみたいものである。

事典 古代の祭祀と年中行事

岡田荘司[編]

吉川弘文館、2019年2月10日刊、450ページ、ISBN 9784642014786、本体3,800円+税

評／鈴木岩弓(東北大学総長特命教授/宗教学民俗学)



天皇の代替わりという、我々が一生の間にそう何回も経験することのない節目を迎えた今年2019年は、元号が平成から令和へと代わるとともに、通常の年には見られない皇位継承を内外に示す「御大礼」と呼ばれる特別な儀礼が行われる年でもある。

かかる記念すべき年に刊行されたこの事典では、古代に天皇自身が、あるいは天皇が社寺に委託することで行われてきた儀礼を神道祭祀および仏教法会に大別し、60の項目に分けて解き明かしている。わが国では神仏の共存関係が長く保たれてきたため、国家的信仰儀礼も神道祭祀と仏教法会を車の両輪として行われてきた。従って、そうした信仰儀礼は神社においては神職、寺院においては僧侶に委託して執行されるとともに、朝廷内の神祇官をはじめとした宮司によっても斎行され、国家の重事である大嘗祭は、天皇祭祀の極致として天皇自身が執行するという構造をもってきたからである。

本書の「神道祭祀編」と「仏教法会編」では、まず「総論」において神道祭祀や仏教法会のあり方およびその歴史的展開が概説される。次に、年中行事として執行される祈年祭や新嘗祭などの「恒例祭祀」、大極殿御齋会や薬師寺最勝会などの「恒例法会」といったルーチンワークの儀礼が、挙行される月の順番に説明される。その次には、特別な機会にその都度、に行われる大嘗祭などの「臨時祭祀」、一代一度仁王会などの「臨時法会」が解説される。また神道祭祀編では、さらに加えて「伊勢神宮祭祀」の柱が立てられ、神嘗祭や式年遷宮などの国家大事の祭祀に関する項目がまとめられている。天皇と国家の神道祭祀・仏教法会の中には、時代の流

れと共に変化したり、消滅したものも見られる。このような状況に対する本書のスタンスは、記述の中心が古代における成立に焦点を当てて儀礼の本質を明示することにおかれており、この起点を踏まえた上で祭祀・法会の歴史的な変遷についても触れられる。大嘗祭の記述に見るように、これまでの研究史の検討にもとづき、そうした変遷が最新の情報を踏まえて解説されていることは有り難い。とりわけ神道祭祀の執筆者の多くが、編者の門下生とも呼ぶべき國學院大學大学院「神道史研究」ゼミの院生と修了生で構成されていることから、本書は編者を中心とした学派の祭祀研究に関する啓蒙的総決算の書と評価することも出来るであろう。

本書の最後には、「付録」として宮内庁書陵部蔵『神祇官年中行事』翻刻や祭祀用語集、参考図書、付録図版、神道祭祀・仏教法会年表が収録されており、読者に対する理解の便が図られている。とは言え、事典としての活用促進の上からは、索引があればさらに利便性が高められたはずで、これがない点は残念である。

「あとがき」において、編者の岡田荘司は、9月15日の真夜中から早朝に懸けて行われる「石清水祭」に参加した際の思い出に触れ、「平安王朝の祭祀の時間が、ゆったりすすむ。これこそが、人間本来の時間の流れではないのかと思う」と述べる。そして現代人の時間の流れとは異質な時間体験を通じ、「神祇の祭祀とは、創始のときに回帰し、その本分を取り戻す時と場なのである」と結んでいることは大変示唆的である。

風邪見鶏 人類はいかに伝染病と向き合ってきたか

三宅善信[著]

集広舎、2019年2月8日刊、208ページ、ISBN978-4904213674、本体1,200円

評／勝田吉彰(関西福祉大学教授)



本書は感染症と歴史を、神道に限らない広範な宗教的視点から考察した書である。ここで取り上げられているのはインフルエンザ・BSE・ヘルペス・梅毒・天然痘まで幅広く、それぞれが興味深き史実とともに提示されており、専門用語はより咀嚼され、読みやすい形で情報が提供されている。評者としては、天然痘と「鬼」の史実は興味深く楽しませていただいた章であった。また、インフルエンザやMERSなどで、特に多人数に感染を広める「スーパースプレッダー」という存在があり、現場の医療者を悩ませる存在であるが、これを使徒ペテロ、ザビエルや蓮如になぞらえ、いかに優れた教祖がいようと、スーパースプレッダーの存在がなければ、その宗教は急激な拡大は出来ないというくだりは、なるほどと膝を打つとともに、宗教的文脈はある意味、感染症の説明に相性のあう部分があるのではとも感じた。

我々、医療にかかわる者には、感染症の診断や治療にとどまらず、ワクチンや予防に結びつく行動などを含めて一般社会に広く知らしめるリスクコミュニケーションの任務があり、インフルエンザ・麻疹といった日常的に接するものもとより、エボラ熱・デング熱・ジカ熱といった国境を越える感染症についても、マスメディアへの協力も含めて汗を流している。しかしながら、我々の発信は必ずしも、それを必要とする人々にあまねく伝わるとは限らず、それどころか、事実ではない噂・流言が発生して社会不安が発生したり、“感染の発生した国から帰国した健康な人”のような本来無関係な人に対する差別が発生したりという事象に心を痛めているのが実情である。このような中

で、リスクコミュニケーションにあたって宗教者の役割に期待したいところがある。宗教家の講話の場において、話し手は聴き手の注目を引き寄せる術においてプロであり、聴き手は自発的に、熱心に内容を理解しようと努めるという営みが展開している。そこへ、その時点で一般社会に火急に伝わるべき情報が相乗りできれば、噂・流言による社会不安発生に対するワクチンとして有効なのは…とは、私自身が前職・外務省医務官時代の発展途上国勤務のなかで、任地のスーダン、セネガルの教会やモスクで展開している光景を横目に見ながら思っていたことでもある。実際に宗教と教育は歴史的に相性が良く、この日本にも神道系のみならず仏教系・キリスト教系・新宗教系の教育機関が数多存在し、賑わっている(余談ながら、著者のご縁も、偶々、評者が関西福祉大学に職を得たところに始まる)。

そのような意味で、筆者が、普段から継続的に感染症に興味関心を持続し本書を上梓されたことは、心強い思いを抱いている。本書の描写のすべてがエビデンスの確立した医学的データに基づいて書かれているわけではないが、その点は我々医学界が宗教界にどのようなデータ・情報を提供できれば良いのか参考になるわけで、また逆に、本書の歴史的描写や文化論は、一般社会の人々に対して、どのような内容と組み合わせればじっくり入ってゆけるのか、学ばせていただけるものと感じている。今後、第二第三の本書の上梓を期待したい。

三宅善信理事長

1月12日 カトリックの外国人司祭に神道について英語でレクチャー。
 2月8日 『風邪見鶏…人類はいかに伝染病と向き合ってきたか』(集広舎)を刊行。
 3月27日～28日 国際自由宗教連盟(IARF)の国際評議員会に同財務理事として出席。
 4月23日 日本国際連合協会関西本部の理事会ならびに総会を同協会の副本部長兼理事長代行として開催。

5月30日 大森光祥辯天宗第三世管長晋山祝賀会に列席。
 6月11日～12日 京都で開催されたG20諸宗教フォーラム2019の運営委員長を務める。
 6月19日～21日 シンガポールで開催された国際会議ICCSに招待される。
 7月4日～7日 サイパンでの遺骨収容と「バンザイ突撃七十五年慰霊祭」に参列。
ファビオ・ランベッリ理事
 2018年9月、カリフォルニア大学・サンタバーバラ校宗教学



サイパンで神仏合同の慰霊祭を仕える三宅善信理事長

学科長に着任。
 今年度は、三つの研究課題に専念した。
 ①日本のアニミズムの多様な形態を描く論文集の編集。Spirits and Animism in Contemporary Japan: The Invisible Empire, edited by Fabio Rambelli. London and New York: Bloomsbury, 2019. (ランベッリ編『見えない帝国―近現代日本の霊魂観とアニミズム』そのなかで、現代アニミズムの系譜の試みや、日本文化の多くの分野における霊魂観の様々なかたちを取り上げる。
 ②長年追求してきた日本宗教の物質性(マテリアリティ)研究の新しい展開として、若手研究者の論文集を編集。“Materiality of Religion in Japan,” special issue of Japanese Religions, n. 43, co-edited by Jørn Borup and Fabio Rambelli (July 2019) 『日本宗教』特集「宗教の物質性」Jørn Borup 及び Fabio Rambelli 共編(2019年7月刊行)。
 ③新しい研究課題で、雅楽の文化史。笙という楽器を中心に、雅楽の思想やその儀礼的な役割などについて、ハーバード大学、スタンフォード大学などで発表。このプロジェクトの一貫として、カリフォルニア大学・サンタバーバラ校で雅楽の公演を企画した。

真弓常忠先生を偲んで

神道国際学会理事長 三宅善信

新元号「令和」発表の興奮もさめやらぬ中、本会顧問の真弓常忠先生(享年96)の訃報に接した。皇學館大学教授、八坂神社宮司、住吉大社宮司を歴任され、神社界に大きな功績を残された真弓先生には、本会発足2年目の1995年以来「顧問」として、大所高所からご指導を賜った。
 民俗学者の吉野裕子氏を招いて八坂神社で開催された国際セミナーや、2007年に日中両国で開催された「日中交流一四〇〇年記念国際シンポジウム」など、晩年まで国際的な視野から神道について発信され続けた。神道学者としての真弓先生は、大嘗祭研究の専門家だったので、令和の大嘗祭についてもまだまだ教えていただきたいことがたくさんあった。隠世に身罷られて後も、本学会の今後の活動をご照覧いただきたい。

サミール・ヌーハ先生を偲んで

神道国際学会理事長 三宅善信

平成最後の日、敬愛するサミール・ヌーハ先生(享年73)の訃報に接した。サミール先生は、私が親しくお付き合いしていた唯一のエジプト人であった。サミール先生は、神道国際学会のシンポジウムやフィールドワークにいつも参加していただき、本誌第54号にも「感想文」をお寄せくださった。イスラム教徒の視点からいろいろと貴重なご意見を賜った。

第22回 国際神道セミナーのお知らせ

令和元年10月29日、東京都千代田区の関西大学東京センター講義室において、国際神道セミナー「現代の聖地・若者文化と神道」を開催予定です。詳細は決まり次第、お知らせいたしますので、楽しみにお待ちくださいませ。

事務局移転のお知らせ

この度、神道国際学会は、経費の節減とより充実した活動を両立させるために、事務局を移転しました。新住所は次のとおりです。今後とも、どうぞよろしくお願いたします。

新住所：〒154-0014
 東京都世田谷区新町3-21-3
 桜神宮 神習会館内
 新電話番号：080-7662-0640

(ホームページURL や事務局メールアドレスは変わりません)

神道国際学会からのお知らせ

- ◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
- ◎ご入会のご案内: 神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

一般会員(年会費)	5,000円
賛助会員(年会費)	30,000円
特別賛助会員(年会費)	50,000円
法人会員(年会費)	100,000円

NPO法人 神道国際学会 〒154-0014 東京都世田谷区新町3-21-3 桜神宮 神習会館内
 Tel. 080-7662-0640 info@shintou.org

編集後記

この数か月、私たちは大きな出来事を経験しました。私たちが世帯が初めて経験する譲位による御代替わり、そして日本で初めての開催となったG20です。元号が「令和」となってはや3ヵ月お祝いムードは一段落の感がありますが、秋の大嘗祭に向けて、世の関心が再び高まること予想されます。今春開催のセミナー「譲位儀礼と大嘗祭」についての記事が、その一助になれば幸いです。またG20に関連して、諸宗教フォーラムが京都で開催され、世界中の様々な宗教者が地球と人類に課せられた諸問題を真剣に話し合いました。本紙でも関連記事を大きく取り上げておりますので、こちらもご一読ください。